先週の礼拝メッセージ(2023 年６月 11 日ハシモト祐美子姉)

「いのちと交わる喜び」　　ヨハネの手紙Ⅰ　1:1-4

この手紙が書かれた時代、教会の中に間違った教えが入り込んでいました。それは、イエス様が人となってこの世に来てくださり、人として十字架で死なれたことを受け入れないというものでした。当時のギリシャ哲学の影響から、救いの対象は霊だけであって、欲を持つ肉体は悪であり、聖なる神が悪である肉体をもって現れるはずがないというように考えたのです。そこでヨハネは、危機感をもって教会に手紙を書きました。

「初めからあったもの、私たちが聞いたもの、目で見たもの、よく見て、手で触れたもの、すなわち命の言について。」(1:1)

挨拶も抜きでいきなり本題に入っています。ヨハネ自身が、人として来られたイエスキリストに確かに会って、その言葉を聞いて、見て、手で触れたのだと証しするのです。特に「よく見て」という表現は、よく考えて理解したという意味です。彼自身の経験から、確かにイエス様は受肉した救い主であると強調しているのです。

さらに４：１、２では、神秘的なものに惑わされず、イエスキリストが肉となって来られたことを告白する霊(4:2)のみが神から出たものだと語っています。このように、教会を揺さぶる異端の教えに対して、教会はどう対処すべきかをパウロは３節で語っています。

「私たちが見たもの聞いたものを、あなたがたに告げ知らせるのは、あなたがたも、私たちとの交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父と御子イエスキリストとの交わりです。」

私たちはこの世にあって、世の価値観、反キリストに取り囲まれて生活しているということを心に留めるべきです。そんな中で、兄弟姉妹の交わり、すなわち御父、御子、聖霊との交わりを元にした交わりが、聖く歩む鍵となるのです。

「だから、私たちは押し流されないように、聞いたことにいっそう注意を払わなければなりません」(ヘブライ 2:1)

では、私たちの交わりとはどのようなものでしょう。兄弟姉妹との交わりは、上下関係のない横のつながりです。(図 1)　しかし、世の中にも、上下関係のない横のつながりは山ほどあります。サークル活動やママ友、趣味、学校の友達などです。教会での兄弟姉妹との交わりはそれとは一線を画します。交わりの中心に縦の棒、御父、御子、聖霊との交わりにしっかりと繋がっているということです。(図 2)

それはまさしく十字架です。(図 1+2)　十字架のもとにある交わりこそ、教会での麗しい交わりとなるのです。なぜなら性別年齢、立場を超えて、同じ御霊が内住していてくださるからです。

「信仰の創始者であり完成者であるイエスから、目を離さないでいなさい。」(ヘブル 12:2 新改訳 2017)

私たちの信仰が堅く保たれるためにも、私たちはイエス様から目を離さないということは大切なのです。イエス様が十字架の苦しみを全うされたのは、私たちの救いのためであり、さらに救われた私たちが主を知り、主をほめたたえるためなのです。それほどに神を知る、賛美を捧げるということは素晴らしいことであり、神様は、そのように生きる私たちの存在をどんなに喜ばれていることでしょう。

クリスチャンの交わりのゴールは、「私たちの喜びが満ち溢れるようになるため」(1:4)です。本来私たちは、神を知るどころか、永遠の命にあずかるとか、主の栄光を表すなどとは全くかけ離れた者、罪人でした。しかし、イエス様の十字架と復活によって、あり得ないことが私たちの上に起こったのです。私たちの罪は誰のせいでもありません。自らが自分の罪を認識し、罪の重さと十字架の贖いの尊さを知らなければ、ヨハネが危機感を持って手紙を書いた教会の人々のように、イエス様を知りながら、異端の教えに流されてしまう危険があるのです。

だからこそ、十字架のもとに集まる教会の交わりにおいて、互いに罪を告白し、イエス様の十字架を共に見上げることが重要なのです。神を知ること、お互い赦し合い愛し合うこと、それが教会につながる私たちが神の栄光を表す唯一の方法です。そのような共同体として、共に主にあって成長していこうではありませんか。

図 1

図 2

図 1+2